
なんでも屋 [AllOK]

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでも屋「A11OK」

【Zマーク】

N7877C

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

なんでも屋の青年がいろんな仕事をこなし様々な人と関わっていくそんなストーリーです。よければご覧下さい。

なんでも屋「A11OK」

なんでも屋

それは依頼があればどんな事でもやるお店。

『庭の草むしりから家のお掃除までなんでもこなします!...仕事達成率100%!...なんでも屋「A11OK」...どうぞお気軽にして利用下さい!...』

それがこのお店「A11OK」です。

A11OK店内

お店にはBGMが流れ、カウンターがあり、中ではコーヒーを飲みながら天井眺めている青年がいる。

「.....仕事.....こねえかな.....」

なんでも屋「A11OK」ただ今開店中。

第一部 ナル

「赤字かな」

店内で家計簿らしきものを見ながら呟く青年がいた。名前はジュン
歳は18。店内にいるのはジュン一人だけだった。

「金がねえ、客がこねえ、仕事もこねえ……」

カウンターに持たれながら天井を見て呴くジユン。

「俺の生活がああああああああ」

ちなみに持ち金は3000円。本気で生活が出来ないほど追い込まれてるジーン。

カランカラン

密だ！－！ちなみに二日振りだ！－！

入ってきたのは40半ば程の男性だった。男性は一度店内を見渡しカウンターに座った。

「注文は？」

ちなみになんでも屋「A11OK」は喫茶店も兼ねているので「一

バーを飲みに来る客も少くない。

「あの……マスターのジュンさんに依頼をしたいんですが……」

男性は控えめに尋ねてくるがジュンはそれに笑って答える。

「俺がこの店のマスターのジュンです」

依頼内容は遺伝子操作研究をしている研究所と組織の壊滅。

「受けて頂けますか？」

ジュンは何も答えない。

「あの……」

そんなジュンを見て困った顔をしている男性に

「わかりました、その依頼確かに受け致します。料金は前払いです200万、依頼成功後さらに200万。これでならお受けさせて頂きます。」

男性は何も言わずに頷いた。

「さて、どうしたもんかな……」

ジュンは依頼を受けた研究所の前にいる。服装は一ツト帽に黒のジャケット、下はジーパンの何処にでも居そうな服装をしているが、両手にしている金属の手甲と、腰の後ろにバッグを描くように吊している2本の長刀がとても異様だった。

「正面突破は面倒だな、かと行って特にいい案はないしか……」

一度目をつぶつて深呼吸したあと、不適な笑みを浮かべた。

「正面突破だな。」

おもむろに右手を銃のよう構える

「さて、ミッションスタートだーー！」

右手が輝き、その先端から矢が放たれる。一本ではとまらず何十本と続き研究所の正面には沢山の光の矢が突き刺さっている。

そしてそれを関知したように様々なロボットが現れる。

「警備ロボット……にしちや物騒なモン付けてんな、おい」

人の形をしたロボット達は両手に拳銃を持ちジュンを標準にしている。

「侵入者、接近、目標、捕捉、発砲、許可、発砲、開始」

機会的な言葉を発して発砲していくロボット

「発砲開始つて、ちょいまてやあああああ……」

焦つて物影に隠れようとすると

「物影がねえ！？」

回りにあるのは研究所のみ物影などありはしなかつた。

だがロボット達はお構いなしに撃つてくる。

「ちいっ……」

右の刀を右手で抜き、

斬！！

ロボット一体を高速で近づき、頭を貫く。そのまま右方向に振り抜き、刀の長さに物をいわせて一体を切り壊す。

「突っ込んだら面倒だよなやつば

ジュンはそうこうと、右手をさつきのように構え研究所の上に向けた。

「降り注げ」

一瞬にして放たれた光の矢は上空から落下し研究所に雨のように降り注ぐ。

後に残つたのは光の矢が至る所に突き刺さっている研究所だけだつ

た。

「ハッシュコンペニー」

呟いてその場から立ち去りついた。

ガンツ――！

研究所の下からドアかなにかを叩いてる音が聞こえる。

ガンツ、ガンツ

音はなりやまづ研究所の一部が膨れ上がつていぐ。

ガンツ――――！

一際大きな音がなると研究所の一部が吹き飛んだ。
研究所の下から出てきたのは研究員らしき男が数名と

「子ども？」

まだ五歳くらいの女の子だつた。

研究員らしき男は研究所を見回した後ジユンの方を睨んだ。

「貴様何者だ？」

「別にたいしたものじゃねえ。ただの喫茶店のマスターだ。」

当たり前のように答えたジユンを見て研究員はニヤニヤと笑つた。

研究員はジュンの方を見たまま言った。

「殺せ、〇三九」

今まで黙つて立っていた女の子が腕をジュンへと向ける。そして

「なつー!?

女の子の腕が光りその姿を銃へと変えた。

「殺せ」

研究員の言葉と共に女の子は弾丸を放った。

弾丸は音速を超えてジュンの心臓を撃ち抜こうと迫るが金属音と共に
弾かれる。

「銃弾を…弾いただとー!?

銃弾は右手の手甲で弾かれた。

「遺伝子操作か、それとも何か別のものか…、何にしてもあの子の
意志で撃つてる訳じゃねえな。」

右手の手甲の調子を確かめながら呟いた。

《じやなきやあの子が泣く訳がない》

女の子は確かに芽から涙を流し震えていた。
ジュンは右手の手甲を強く握った。

「助けてやるよ。嬢ちゃん」

研究員を睨みながら放った言葉はその場に居る研究員を威嚇するには充分な殺氣を放っていた。

周りにあるのは、私を閉じ込めていた研究員の体と私が閉じ込められていた研究所のなれの果てだった。

そして、目の前にいるのは助けてやると言った男の人。その人の優しさ溢れる笑顔を見た時私は意識を失った。

なんでも屋A-L-L-O-K店内

ジユン視点

あの後、倒れた女の子を連れて店に戻ってきたが女の子は一向に田んぼを覚まさない。

「ん……」

お、やつと熙り姫のお田覚めか。

「ううう……じいじ……？」

「俺の店だよ。俺のことはわかるか？」

小さく頷く女の子を見て今までのことを簡単に説明した。多分ぼーっとじつち見てたから聞いてねえな。

「で、これからどうするかなんだが、聞いてたか？」

首を横にフルフルとした。

なんかとてつもなく和んだ。

「パパと……いる……」

「パパ？誰が？俺が？

「パパああああああつー？俺がー？」

女の子は俺をしつかり見て頷いた。

その後しばらく女の子との話し合いが開始された。

「わかった。ここにいるのは問題ない。せめてパパは止めて兄にしてくんねえか？」

「やだ…パパ」

「人を指差すのはやめなさい。それとパパじゃない。」

「やだ…パパ」

こんなやりとりが30分続いた。

結局この子はここに住むことになり俺は晴れてパパとなつた。
この女の子ナルとのお店経営が始まつた日だった。

ナルが店にすむようになつて数日が立つたある日の朝。

店内ではジュンがのんびりと自分で入れたコーヒーを飲んでまつたりしている。ちなみに午前6時。しばらくすると店の奥から可愛らしい女の子が出てきた。

「おはよひ、パパ…」

「おう、起きたかナル。」

女の子ナルはジュンの元へとトテトテと近づく。そして椅子に座っているジュンの膝へと座つた。

「パパ、朝ごほんは？」

「今作つてやるよ。なにがいい？」

「ん~、パパがいい」

「お前は俺を食い物だとおもつたのか？却下だぞあほ」

呆れた顔でいいながらもジュンは少し笑っていた。

「へへへ」

そんなジュンを見てナルは嬉しそうに笑つた。

ここ数日で馴染んだジュンとナルは毎日たわいもない会話をしながら

ら笑いあつていた。

午後10時店を開店してから数分立つと一人の老婆とスースの男が二人入つてきた。

「いらっしゃい

笑顔でお密に詰つナル。老婆は驚いた顔でナルを見たがすぐに笑顔になつた。

カウンターに座つた老婆を守るよつにスースの男は老婆の左右に立つた

「あんたがこの店のマスターかい？」

「ええ、俺がこの店のマスターです。で、ご注文は？」

「依頼だよ。それとブレンドコーヒー、一つ」

「ブレンド一つね。それで依頼の内容は？」

「コーヒーを淹れながらジユンは聞いたが老婆から返事は来なかつた。

「はい、ブレンド一つ」

老婆は「コーヒーを一口飲むとじめりく黙りこんだ。

「いいコーヒーだね」

「そりゃどうも、でそろそろ依頼の内容を聞きたいんだけど?」

「なに、たいした事じゃないよ。あんたに私がやっている魔法学校に入学してほしいんだ」

「潜入か?」

「いや、ホントにただの生徒として入学してもうこたいのか。」

「ホンキかよ……依頼としてなら受けがなんのために俺を入学させたいんだ?」

「なに、近頃物騒だからね。生徒の護衛を兼ねてお願いしたいのか。料金は弾むよ。」

老婆の顔を見るが裏があるよつこには見えない。

「わかった。受けるよその依頼」

「そうかい。それとしつかり三年通つて卒業するんだよ。あとその可愛らしいお嬢ちゃんも一緒に入学させてあげるよ。一人とも勿論お金は全て免除してあげるかわりに寮の管理人をしてもらうからね。住所はこの紙に書いてあるよ。じゃあたしはこれで。入学式は一週間後だよ。遅刻しないようにな。ああ寮にはちゃんとあなたの部屋もあるからね。はやめにいくんだよ。」

「ううだけ言つてさつと帰つた老婆を唖然と見つめるジユンと話がよくわかつていなナルだけが店内に残された。

一週間後

ジュンとナルが今いるのは学校の体育館。今まさに入学式の最中で新入生であふれかえっている、年齢は様々でナルと同じ年くらいの子から、ジュンと同じ年くらいの子まで、体育館であふれかえっている。

「…………つまらん…………」

「……パパ……」

「どうした?」

「おやすみなさい……」

当たり前のようにジュンの膝を枕にして寝るナルと

「おこおこ……」

苦笑いをしながら周りの視線に耐えて、目の前で話しているお偉いさんの睨みに耐えるジュンだった。

入学式が終わっても起きないナルを背負つてクラスに向かつたジューはクラスに入り学校生活第一歩を踏み出した。

「久しぶりですね、ジュン」

踏み出した瞬間殺氣を纏つた水色の髪をした美少女に剣を突きつけられる

「つまつー？」

首筋にピタリと止まっている剣を見ながら冷や汗を流し水色の美女を見る

「ひ、久しぶりだな、ヒスイ…」

ヒスイと呼ばれた美少女は誰をも魅了する笑顔で

「死ね」

「あやああああーー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7877c/>

なんでも屋 [AIIOK]

2011年1月14日03時39分発行